

令和2年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立志染小学校
-----	-----------

1 学校教育目標

心豊かに 元氣よく 主体的に学ぶ子の育成
～ 元氣なあいさつ 笑顔いっぱい みんなかがやく 志染っ子 ～

2 本年度の重点目標

- ・豊かな心と社会性の育成
- ・「確かな学力」の育成
- ・子どもの実態や内面理解に基づく指導の充実
- ・自立した人づくりに繋がる生活習慣の形成

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	○確かな学力の向上を図る 学習指導の充実 ・「学び合い」でつながり高め合う授業づくり ・主体的に学ぶ子の育成	・新型コロナウイルス感染症による臨時休校があったが、行事の削減や工夫により授業時数を確保し、教育課程を実施することができた。 ・学ぶことが楽しいと実感できる授業づくりを目指し、児童自らが課題を見つけ、級友と共に考えを深めることのできる指導方法について研究を進めた。その結果、児童も学ぶ楽しさを感じ進んで学習に取り組むようになった。 ・基礎学力の向上を目指し、モジュール学習(朝の学習)を充実させた。全教師が関わる中で、学習習慣の定着と児童が主体的に学習課題に取り組む姿勢が身につくことを目指した取組を進めた。	A	・2年間の研究指定を受け、授業改善に取り組んできた結果、成果が現れている。今後も継続して児童が主体的に課題解決に取り組む、思考を深めるための指導方法や支援の在り方を研修していく。 ・児童は学ぶ楽しさを実感し意欲的に学習に取り組むようにはなったが、今後はそれを基礎学力の向上につなげることが課題である。学校全体として、主に計算力向上を目指したモジュール学習に取り組む、児童が自身の成長を実感できるようにしていく。 ・一人一台配置されるタブレット端末の有効活用等、ICTを活用した主体的で対話的な深い学びの実現に向けた取り組みを進めるとともに、三木市と協働し、オンライン学習の体制づくりを行っていく。
道徳教育	○道徳の時間の充実 ○家庭・地域と連携した道徳教育の充実	・コロナ対応で授業日数の確保に苦慮したが、年間指導計画に基づき、すべての価値項目に関する授業を行うことができた。参観日が実施できなかったため、道徳授業の公開をすることはできなかったが、道徳ノートを持ち帰らせて保護者に見せたり、家庭で教科書の音読を取り入れたりするなど、発達段階に応じた方法を取り、家庭との連携を心掛けた。 ・「兵庫県道徳副読本」の親子読書は、道徳について家庭で話し合うよい機会となった。	A	・今後も児童の実態に合わせて重点項目や年間指導計画の見直しを行う。 ・道徳の授業だけでなく、全ての学校生活において、思いやりや相手を理解するなどの道徳的価値を取り上げることで、児童の道徳性を培う。 ・授業公開や親子読書を継続し、地域・家庭と連携した道徳教育の充実を図る。 ・動物の飼育等を通して、命の大切さを実感させる取組を行う。
人権教育	○全教育活動における人権教育の充実 ○家庭・地域と連携した人権教育の充実	・「かがやきの木」や「かがやきの森」の取組を通して、互いの良さを認め合うとともに自尊感情を高めるなど、全教育活動において自分や友だちを大切にし、豊かな人権感覚を身につけるようにした。 ・「親と子が共に学ぶ人権学習」では、新型コロナウイルス感染症拡大のため実施が危ぶまれたが、対策を取り実施した。保護者と事前の話し合いの場をもち、各学年の人権目標に即した授業を展開することができた。懇談会ではできなかったが、大きな成果を上げることができた。 ・人権集会において、地域教材を朗読劇にして発表したことにより、全校生が人権について考え、地域を大切に思う気もちを抱く取組ができた。	A	・全教育活動における人権教育の充実を目指して、人権教育目標に基づいた評価や見直しを行い、人権教育と各教科での児童が相乗的に効果を上げることができるよう取組を引き続き推進していく。 ・学校での取組内容について、学級、学校通信で具体的な情報を発信するとともに、「親と子が共に学ぶ人権学習」においては保護者との交流方法を工夫するなど、家庭や地域と連携しながら人権教育を進めていく。 ・中学校の統合により、志染小学校の担う役割は今後大きくなる。これまで以上に人権教育の推進体制づくりを行う。
生活指導	○家庭と連携した基礎的・基本的事項の定着 ・挨拶運動の推進 ・場に応じた言葉遣い ○いじめや不登校児童を出不さない取組 ・「学校いじめ防止基本方針」 ・「学校IKOKAマニュアル」	・生活チャレンジ週間において、挨拶を目標に定め、様々な場面で挨拶ができるように指導と評価を行ってきたことで、進んで挨拶ができる児童が多くなった。 ・毎月の生活指導委員会で、児童の情報共有を行った。気になる児童を多く目で見守り、指導の統一と早期対応を心掛けた。 ・場に応じた言葉遣いや挨拶の指導に意識して取り組んだが、定着が不十分である。各学年の成長段階に応じて意識づけさせていくことが必要である。 ・学期ごとの生活アンケートの実施による実態把握で、課題の早期発見・早期解決に努めた。	B	・学期ごとの生活チャレンジ週間は、継続して実施する。 ・定期的に校内委員会や生活アンケート等を実施し、児童の小さな変化に気を配るとともに、情報共有を行い課題の早期発見、早期対応に継続して努める。 ・児童自身に自らの生活を振り返らせ、改善が必要な事項を考えさせながら、毎月の生活目標において課題を示し、その定着と達成に向けて指導していく。 ・挨拶、言葉遣い、時間を守る等、基本的な生活習慣の確立のための指導を継続して行う。 ・「学校いじめ防止基本方針」に沿って、いじめの早期発見や未然防止に向けた取組を継続していく。 ・統合を踏まえ、中学校区の小学校及び中学校との「学校のきまり」等についての情報共有を行い、スムーズな接続を図る。
特別支援教育	○児童理解に基づく適切な指導と必要な支援の充実 ○特別支援教育の充実	・個別の支援計画や指導計画を作成し、配慮を要する児童の情報交換を行い共通理解を図ったことで、全教職員で情報を共有し指導することができた。 ・支援を要する児童に対し、他の児童は優しく接することができ、共に学ぼうとする姿勢が育ってきた。 ・新型コロナウイルス感染症のため、活動を自粛したため特別支援学校との交流及び共同学習については十分な取組ができなかった。	B	・支援を要する児童については、継続して家庭や関係機関と密に連携し、情報共有するとともに協力して指導を行う。 ・友だちのよさや特性を理解し受け入れ、共に成長していける学級づくりを行う。 ・特別支援学校との交流については、手紙の交換やWeb会議など従来の方法にとらわれず交流を続けていく。
特別活動	○自主的活動の充実 ○異年齢集団活動の充実 ○一人一人が活躍できる場の設定 ○ねらいに即した振り返りの充実	・委員会活動やクラブ活動では、児童が主体的な活動ができるよう支援することにより、一人一人が活躍の場を得て、積極的に活動することにつながっている。 ・スマイル班(異年齢集団)の活動を通して、高学年は主体性と責任感を育むことができています。また、活動後のふりかえりを大切にし、感想を述べあうことで、高学年児童は「やりがい」を感じ、低学年児童は「目標とする姿」を思い描くことができ、次の活動への活力となっている。	A	・スマイル班(異年齢集団)の活動では、今後も「ねらい→活動→ふりかえり」を大切に、高学年がさらにリーダー性を発揮しながら、すべての児童が温かい人間関係を築いていけるよう支援していく。 ・委員会活動では、高学年児童に学校を動かすリーダーとしての意識をもたせ、計画、運営にあたるよう支援していく。 ・発達段階に応じて、一人一人が活躍できる場を設定し、自主性や責任感をもって活動し、達成感を味わえる活動が行えるよう支援を継続していく。
家庭・地域との連携	○「地域の中の学校」として信頼される学校づくりの推進 ・広報活動の充実 ・「ふるさと学習」の充実 ・ボランティア(人材)の活用 ・異校種間連携の充実	・臨時休校中には、家庭学習や生活課題のポスティング、通信やHP、動画配信等による学習支援を行うとともに、保護者にも協力を依頼し学習保障に取り組んだ。 ・新型コロナウイルス感染症拡大のため、参観日、オープンスクール等学校行事の中止変更等がある中で、学校の方針を発信し信頼される学校づくりに努めた。 ・「志染っ子かがやかせ隊」(人材バンク)の皆様には、今年度は来校していただくことができなかったが、つながりは維持できている。 ・中学校の統合を見据え、緑ヶ丘中学校区の小・中学校との交流会や合同研修会を実施した。 ・新型コロナウイルス感染症拡大の中、入学へのスムーズな接続のため、こども園、保育所とビデオレター等による交流を行った。	B	・新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を見据えて、学校行事、オープンスクール、参観日等の学校公開や学校だより、HPの更新による情報発信を積極的に行い、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進していく。 ・地域の教育力を有効活用し、教育効果を上げるため、「志染っ子かがやかせ隊」(人材バンク)の活用を進める。 ・総合的な学習の時間を通して、「ふるさと志染」について学ぶ機会を設け、ふるさとを愛する心を育成する。 ・就学前の園等や中学校区の小学校、中学校との連携については、年間計画の中に連携活動を位置づけ積極的に進める。また、交流方法については、従来の方法にとらわれず工夫を行う。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

- ・自己評価項目は、適切である。
- ・自己評価方法は、アンケートの観点にそれぞれ3種類の質問があり、その結果を踏まえた客観的評価がしてあるので適切である。
- ・アンケートは保護者、児童、教職員に対して実施され、3者を比較しそれを元に適切に自己評価されており適切である。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>1 学習指導についての自己評価Aは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことが楽しいと実感できる授業づくりは今後も取り組んでほしい。 ・「みんなの前で意見が言え、友達の見聞が聞ける」は第一歩であると思う。「友だちの発言で自分の考えが変わったり、自信をもったりすることができる」ということを目指してほしい。 ・朝のモジュール学習「ホットタイム」は、子ども達の学力の定着向上に確実に効果があったと思う。 ・朝のモジュール学習「ホットタイム」やタブレットの活用などに力を入れて取組み、保護者の「先生は熱心に指導されている」への肯定的な評価が100%と素晴らしい結果となっている。 ・ICTを活用した教育環境が急激に進むと思われるが、小規模校・少人数ならではの特徴を活かした指導を工夫してほしい。 ・タブレット有効活用の今後の広がりがとても楽しみである。 ・新型コロナウイルス感染症による臨時休校中の先生方の努力に対して保護者として感謝している。
<p>2 道徳教育についての自己評価Aは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍であったが、授業時数を確保し、道徳的価値内容項目のすべてを指導できていることに感心させられた。 ・コロナ禍で参観日が実施できなかったことは残念だったが、副読本を使った親子読書の取組は、親子で話し、考える機会となった。 ・県版副読本を活用し、家庭との連携もできている。保護者も学校での学習状況がわかり安心できていると思う。 ・親子読書等、家庭や地域と連携し価値を共有することで、子のみならず親にとっても気づかされることが多いと思う。
<p>3 人権教育についての自己評価Aは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・志染小学校の特色の一つである親子人権学習もコロナ対応をして工夫しながら実施されており、評価は大きい。 ・「かがやきの木」「かがやきの森」の取組は、子ども達も喜んで取り組んでおり、とてもよい取組だと思ふ。 ・こんな時期なので、地域となかなか連携できないと思うが、改善の方策に同意する。 ・中学校統合により、特に高学年の人権学習が重要になってくるだろう。部落差別をはじめタイムリーな人権課題にも取組を広げてほしい。 ・児童の特別な支援を要する児童や特別支援学級の児童とのかかわりを見て人権感覚の高さを感じた。 ・もう一歩取組を深め、高齢者、男女、人種、障がい者、部落問題などの課題についても評価項目に加えるとより具体的に思う。
<p>4 生徒指導についての自己評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもや親との信頼関係をもとに、一人一人に配慮したきめ細かな指導がきつとできていることと思う。継続して評価し続けてほしい。 ・登校日150日中100日が全員登校(2月26日現在)、委員会の毎月開催、生活チャレンジ週間実施など、素晴らしい取組や結果である。 ・「学校は楽しい」というアンケートに対して回答が保護者、児童とも肯定的に評価していることをうれしく思う。 ・改善の方策で統合を踏まえて、進学する中学校は勿論、中学校区の3小学校で情報共有することは非常に大切なことでよいと思う。是非お願いしたい。 ・「場に応じた言葉づかい」の評価では、児童と保護者で少し乖離がある。一歩進めて、保護者にどのような場で、どんな言葉なのか調査し児童にフィードバックして価値観の統一を図りたい。 ・子どもたちとあいさつする機会が少なかったため、保護者のあいさつができていないという評価が正しいかどうかの判断ができない。自己評価Bは厳しいように思う。
<p>5 特別支援教育の自己評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「支援を要する子や困っている子に優しく接している。」「特別支援学校や若草学級の友だちとなかよくしている」というアンケートに対する高い評価や若草学級児童が明るく元気に学校生活を送っていることが現状の良さを示している。 ・支援を要する児童に他の子ども達が優しく接したり気持ち理解しようとしていたり姿勢に心が温まった。 ・子どもの成長に向けて、丁寧に関わっていただいている。 ・特別支援学校との交流中止は、やむを得ないことである。しかし、お互いに理解し合うためにも交流の機会を持ち続けることが大切である。 ・特別支援学校との交流についてビデオレター等の工夫を行い、継続を期待したい。
<p>6 特別活動の自己評価Aは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スマイル班活動や委員会活動を通して、高学年になるにつれ、児童の積極性が高まっていることを感じる。 ・スマイル班の活動を子ども達は楽しみにしており、高学年のリーダー性も確実に身につけていると思う。 ・小規模校のメリットを活かした運営ができている。 ・高学年のリーダー性は、このような特別活動によって育まれると思う。高学年が輝くと学校全体が輝く。 ・一人一役以上、みんなの前で話す場面を今後も多く設定してほしい。
<p>7 家庭・地域との連携の自己評価Bは、適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休校中の家庭訪問での課題配布や回収等大変だったと思う。その工夫や努力が保護者や地域の方の信頼をより一層強くしたと思う。 ・「家の人や地域の人を招いての学習や行事に楽しく取り組んでいる。」「先生は自分のことをわかってきている」「先生に相談しやすい」などのアンケート項目について高い評価が得られている。家庭との信頼関係が築かれていることがわかり評価できる。 ・こども園、保育所との連携方法として、ビデオレターに着眼した点はすばらしく、Webやリモートを含めほかにも転用できる方法であると感心した。 ・今後は志染小学校が地域の未来を担う唯一の教育の場となる。伝統・文化を受け継いでいくためにも家庭や地域と一体になって「ふるさと学習」を進めてほしい。 ・様々な行事が中止され、人の集まることもできない状況であるので、次年度は改善の方策のごとく活動していただきたいと思う。